

## 2022年4月17日復活日説教

イザヤ書 51章 9-11節

コロサイの信徒への手紙 3章 1-4節

ルカによる福音書 24章 1-10節

イースターおめでとうございます。東京聖三一教会の皆様と迎える初めての復活日です。あらためてどうぞよろしく願いいたします。

本日は、先週に引き続き、AグループとBグループと合同で礼拝しております。先週の教会委員会での協議の結果、来週からも引き続き合同で礼拝をしていきたいと思っております。すぐにすべてがコロナ禍以前には戻りませんが、心を新たにしてお一緒に礼拝を続けていきたいと思っております。

さて、本日は、復活日です。イエス様の復活は、教会にとって、そして私たち一人ひとりにとって、もっとも大切な出来事です。しかし、復活は、歴史的に、あるいは科学的に証明できるような事柄ではありません。理解すべき事柄ではなく、信じるべき事柄です。本日は、そのことを「ルカによる福音書」にある復活の物語から、あらためて学びたいと思っております。

本日の福音書のお話は、イエス様が十字架上で逝去され、アリマタヤのヨセフによって葬られあと、一日安息日を挟んだ、三日目の出来事です。「そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った」と続きます。日本語の聖書では、24章1節が唐突に始まっていますが、23章の最後は、「婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ」とありますので、物語としてはしっかりと流れを説明しています。

女性たちの名前は、あとの10節で説明されるのですが、それはマグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちです。彼女たちは、亡くなったイエス様の葬りのために墓に向かいました。しかし、「見ると、石が墓のわきに転がしてあり、中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。そのため途方に暮れている」（ルカ 24：2-4）のでした。この表現からわかる通り、彼女たちは、イエス様が復活したと思ったのではなく、遺体が持ち去られたと思ったのでしょう。空虚の墓の最初目撃者たちは、何が起こったかわからなかったのでした。

しかし、彼女たちは、「輝く衣を着た二人の人」から、イエス様が前もって伝えていた通りに、復活されたことを告げられ、イエス様の言葉を思い出します。思い出した言葉とは、おそらく9章22節と18章33節にある、イエス様の受難予告の言葉と思われれます。しかし、物語の流れの中で、それらの言葉を受けたのはそれぞれ弟子たちと12人です。その意味では、彼女たちもどこかで類似する言葉を聞いていたのであろうと、暗示しているのです。

それは、彼女たちと一緒に、読者もイエス様の言葉を思い出すようにと、物語が促しているということだと思います。

彼女たちが、目撃したことと、思い出した言葉から、どのようなことを悟ったのかは告げられていません。しかし、お話の語り手は、ただ彼女たちが「そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた」(ルカ 24:9)とだけ告げます。彼女たちが、イエス様の復活を信じるに至ったか否かは、不明のままです。

空虚の墓の最初の目撃者である彼女たちが、信仰に至ったか否かが不明とは、少し残念な結果といえますが、彼女たちの証言を受けた使徒たちの反応はもっと残念なものでした。「使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った」(ルカ 24:11-12)とある通りだからです。12人からイスカリオテのユダを除いた11人のうち、10人はまったく彼女たちの証言を相手にしなかったのです。一人ペトロだけが確認に行きます。しかし、反応は、驚きながら家に帰ってしまうということでした。驚きは、一般的に物語の中で、登場人物がそのあとどのような反応をとるかの分岐点といえます。そうであるがゆえに、この時点で、空虚の墓を目撃したペトロも、信仰には至らなかったのです。

本日のお話は、空虚の墓の目撃者である女性たちも、それを受けた使徒たちも、そして空虚の墓を改めて確認に行ったペトロも、すぐにイエス様の復活を信じるには至らなかったと告げています。これらのお話が語っていることは、復活という出来事が、人間の理解を超えているということです。復活は、その仕組みを理解したから信じられるような対象ではないということです。「ルカによる福音書」は、そのことを強調しています。

本日の箇所のと、エマオへと向かう途中のお話で、二人の弟子は、「二人の目は遮られていて」(ルカ 24:16)という説明はありますが、復活されたイエス様に出会っても、わからなかったと語ります。また、そのあと復活されたイエス様は、弟子たちに現れるのですが、そこでも「彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った」(ルカ 24:37)のでした。

このような復活の出来事が、教会の信仰の基です。教会の存在と信仰は、この復活から始まりました。また教会のすべて神学や歩みは、この復活から理解されなければなりません。しかし、それは福音書から確認した通り、復活が、人間の思いや考えの範囲の中で、十分に納得できる事実であるからではなく、わたしたちの思いを超えた出来事であるからです。言い換えれば、そこに、わたしたちの思いを超えた、主なる神様のまことの愛と、わたしたちにとってのまことの希望が示されているからこそ、信じるのです。

逆に言えば、主なる神様の愛は、イエス様の復活以外でも知ることができる、イエス様が復活されなくても、世界には希望があると思う。そのように考える人にとって、イエス様の復活は大きな意味はないかもしれません。事実、最初の教会の中でも復活について様々なとらえ方があったようです。

そのような中で、復活が何よりも大切な事柄である、と宣教した一人がパウロでした。パウロは、十字架と復活の出来事以前に、イエス様と一緒に食事をしたり、教えを受けたりしたことはなかったのですが、ただ復活のイエス様に出会って、全てが変わった使徒です。パウロは、律法を学びそれを実行することに、主なる神様の愛を感じ、またその愛に応えることになると思っていた人でした。そして、そうであるがゆえに、イエス様をメシア・キリストとする人々を許せなかったのですが、復活のイエス様に出会い、すべてが変わったのでした。パウロのそれまでの律法にかかわる歩みが、間違っていたわけではありません。しかし、彼は、その歩みをはるかに超えた、主なる神様の栄光に満たされた事柄を、復活のイエス様との出会いに見出したのでした。本日の使徒書、「コロサイの信徒への手紙」は、パウロの真正の手紙ではないとも言われますが、その3章4節にある「**あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう**」という言葉は、パウロが体験した事柄であり、またパウロが目標としていた事柄を示していると思います。それは、今を生きているわたしたちにとっても同じです。わたしたちがイエス様の復活を信じる時、今現在、キリストと共に栄光に包まれているのであり、それぞれの死を迎えたときに、それが完成するからです。

イエス様の時代においてすでに、ユダヤ教では、復活や死後の世界を信じる人もいました。しかし、多くの人は死を終わりと考えていました。それゆえ、今、生きていることを大切にします。ことに、律法に基づいて誠実に生きて、主なる神様の愛を示すことが大切でした。パウロは、まさにその通りに歩んでいたと思います。しかし、すべての人間は、必ずしもそうではありません。それは、律法に基づいてある人が誠実に歩むことを望むか、あるいは誠実に歩むことができたかということを超えて、その人以外の様々な事柄が、妨げになるからです。つまり、誠実に歩もうと願っても、戦争、病、自然災害、不慮の事故など、様々な不条理な出来事に巻き込まれることがあるからです。そして、死を迎えざるを得ないこともあるからです。そのよう中でも、死が単なる終わりであることは、その人にとっても、残された人にとっても、ただただむなしいだけかもしれません。もちろん、そのような空しさからも、主なる神様を信じ続けることも大切です。しかし、人と人との間の思いは、その空しさから、必ずしも平和的な歩みを生み出さない場合もあると思います。

イエス様の登場以前も、そして教会の歩みが始まってからも、また現在も争いがあります。死が終りでしかないとき、様々な思いから、対立関係にある人と人とは、和解にはなかなか到達できないかもしれません。歴史から学ぶという行為は大切ですが、歴史は一般的に期待されるほど客観的ではなく、誰かの主観的な視点に基づいて書かれることが多く、その限界をなかなか超えることができません。主観的な視点のみならず、多くの誇張や捏造も含まれます。それゆえに、歴史から学ぶという基から始まる限り、真の平和には至ることは困難なのです。深い背景を持った主観的歴史観どうしの対立は、簡単には解決しないからです。しかし、イエス様の復活を信じ、それに与るといふ信仰があるとき、心の傷がいつか癒され、人と人との和解、そして神と人と和解が成立し、平和へと歩めると思います。イエスの復活に本当の慰めがあるからです。パウロは、キリスト教徒を迫害しながら、迫害している教会を通して主なる神様の愛に出会い、復活のイエスに出会ったのでしょう。そしてその復活のイエスを宣教し、そのパウロの宣教が、今日読んでいただいたルカの物語へとつながったのでしょう。

今日イースターを迎えたわたしたちは、2022年という年に、日本の世田谷区代沢という場所にある東京聖三一教会で、イエス様の復活を祝っています。リモートで参加されている方々もおられます。そして、今まで通りとはいきませんが、フラワーギルドの皆さまによる様々な飾りつけや（イースターエッグを木に飾るのは初めて見ました）、アコライトのプロセッション、聖歌隊の歌があり、普段の主日とは異なる装いで、礼拝を捧げます。牧師であるわたしにとっても、立派な聖堂で皆さまと復活日をお祝いできることは、大きな喜びでありまた緊張感も増えます。そして、世界中の教会で今日は、それぞれの仕方で主の復活をお祝いしています（正教会の復活大祭は4月24日ですが）。しかし、復活の出来事も復活されたイエス様も一つです。それゆえに、そのわたしたちの祝う行為は、そのイエス様の復活を信じる事柄あるがゆえに、時間と空間を超えて、すべての教会の人々と同じです。今も戦いにある人々の中には、7割以上が教会に通う国々もあります。そのような方々が戦いの中にあることは、ほんとうに残念なことです。しかし、信仰がある限り、戦いの即時終了を求めるとき、そのあとの真の慰めを求めるとき、また人と人とのまことの和解を求めるとき、死が終わりではないというイエス様の復活のメッセージが、基となると思います。そしてその基から力を得て、様々な困難があつたとしても、まことの平和への歩みへとつながるとなると思います。わたしたちが復活を信じることは、わたしたち自身のためであり、この世界に真の平和が訪れるためです。わたしたちが信じ続ける限り、平和への希望は無くなりません。そのことをあらためて心に刻むために、ご一緒に主の復活をお祝いしたいと思います。